

## 人物紹介：フレーベルの使徒としてのヴィルヘルム・ミッデンドルフの生涯

—ヘルターシンケン『ヴィルヘルム・ミッデンドルフ—ある忘れられた教育者』から—

人文学部教授 勝 山 吉 章

### はじめに

ヴィルヘルム・ミッデンドルフ (Wilhelm Middendorff: 1793–1853) は、フレーベルの使徒として教育活動を支えた人物として著名である。ミッデンドルフがいなければフレーベルの幼稚園は広く普及しなかったと言っても過言ではない。だが、ヘルターシンケン (Dieter Höltershinken 1935～/ドルトムント工科大学名誉教授) によると、彼は「忘れられた教育者」で常にフレーベルの「脚注」(Fußnote) として扱われてきたという<sup>(1)</sup>。湯川は、日本においては、明治初期に関信三がマチルダ・クリーゲの英文の著作『フリードリヒ・フレーベル』(1876) でミッデンドルフの名を知っており<sup>(2)</sup>、小西信八が『フレベル氏の略伝』(1893) でミッデンドルフの名をあげていたことを紹介している<sup>(3)</sup>。後書は、東京女子師範学校の授業で小西によって使われた<sup>(4)</sup>。明治初期よりその名を知られていたミッデンドルフだが、その生涯を包括的にまとめたものはほとんどない<sup>(5)</sup>。彼の生涯と教育活動を洗い直すことはフレーベル研究にとっても重要であろう (課題1)。

ミッデンドルフについて筆者がとくに興味を抱いたのは、なぜ、彼はフレーベルと対立しなかったか、フレーベルの使徒でありえたのかということ。フレーベルには多くの信奉者、協力者がいた反面、その激しい気性から身近な人たちとしばしばぶつかった。フレーベルの使徒だったはずのランゲタールは厳しくフレーベルから罵られた結果、彼はフレーベルを憎悪したとユリウス・フレーベルはカイルハウ学園時代を振り返り<sup>(6)</sup>、フレーベルは、カイルハウの最初の教え子であるユリウス・フレーベルやカール・フレーベルとも対立したという<sup>(7)</sup>。幼稚園運動の直接の後継者ヘンリエッテ・ブライマン (1827-?) やザクセンで最初の幼稚園を創設したプロイセン国民議会左派ルードヴィヒ・ヒルデンハーゲン (1809-1893) とともに一時期、絶縁状態になったとケーニヒは述べている<sup>(8)</sup>。ミッデンドルフはフレーベルをどう思い、どう人間関係を築いたのだろうか (課題2)。

以下、ヘルターシンケンの著作: Von Spielen, Liedern und Gebeten für den Kindergarten. Wilhelm Middendorff-

ein vergessener Pädagoge, 2010に依拠しながらミッデンドルフの生涯を追っていく。同書は、Jürgen NeumannによってPädagogische Rundschau 2013/2誌の書評のなかで紹介されている。Neumannは、同書によって「ミッデンドルフは、これまでの文献や研究で見なされていたようなフリードリヒ・フレーベルの単なる協同者だっただけでなく、注目し評価される独自の教育思想を考察していたこと」<sup>(9)</sup>が明らかになったと評価している。

### 1-1. ミッデンドルフの生涯：誕生から学生時代まで (1793-1817)

ヘルターシンケンによると、ミッデンドルフは自営農家の5人きょうだいの末っ子として1793年9月20日、ドルトムント伯爵領プレヒテンで生まれる。村の初等学校 (Dorfschule) に通う。同校教師は福音派教会のオルガン弾きでもあった。彼は、学童期に「直観に基づく知識の習得」、「観察によって、為すことによって、生活することによって自己形成する」ペスタロッチ教育の影響があったと振り返る<sup>(10)</sup>。

同校教師から息子の優秀さを聞かされた両親は1803年、彼を将来聖職者に就かせるべく、ドルトムント公文書館附属ギムナジウム (Archiv-Gymnasium) に通わせる。彼は、法律顧問官と結婚した長姉<sup>(11)</sup>のところに寄宿した。義兄に厳しく躰けられたミッデンドルフは、学校では几帳面で真面目な模範生だったという。シュトライザンドによると、当時のドルトムントは、1806年のイエナ・アウエルシュタットでナポレオンに敗北し、農民解放、営業の自由、市民による自治を保障した都市条例などシュタイン・ハルデンブルクの改革にはじまるプロイセン改革の影響下にあった<sup>(12)</sup>。

1811年11月、福音派の神学を学ぶために、義兄バーロップが勧めたイエナ大学ではなく新設されたばかりのベルリン大学に進学する。長尾によると、当時のベルリンは、プロイセン改革に連動した教育改革の最中にあった。初等教育ではペスタロッチ主義が導入され、大学は自由なる精神の理念的同盟であるとされた。大学の学問は国家

に対しても批判的で自由であるべきと見なされ、学問の頂点には神学に変わって哲学が立ったという<sup>(13)</sup>。

ミッデンドルフは、ベルリンで、シュライエルマッハー、フィヒテ、ヤーンから多大な影響を受ける。シュライエルマッハーからは神学と教育の結合、フィヒテからは、ベスタロッチ主義に基づく新たな国民教育の創造、ヤーンからは来たるべき祖国解放戦争を準備する体操を学んだ。ユリウス・フレーベルは、ヤーンの体操は、鉄棒、平行棒、吊り梯子、歌を歌いながら行軍（行進）などを含み、カイルハウ学園や幼稚園の活動に大きな影響を与えたと振り返る<sup>(14)</sup>。例えば、後年、ミッデンドルフの娘アルヴィーナは、幼稚園において吊り棒、鉄棒、吊り梯子、平行棒などで子どもが体操をしていることを述べている<sup>(15)</sup>。

1813年、ミッデンドルフは対ナポレオン祖国解放戦争に、リュッツオー義勇軍兵士として従軍した。そこでベルリン大学の神学の同級生ランゲタールによってフレーベルと出会う<sup>(16)</sup>。後年ミッデンドルフは、マーレンホルツ＝ビューロー（1816-1893）に、戦闘でのフレーベルの冷静さと、従軍は自らの愛国心の発露であることを述べている。日頃は穏健なミッデンドルフが、解放戦争の話になると軍歌を交えて興奮して話すことにビューローが驚いている<sup>(17)</sup>。祖国愛と社会正義のために銃弾の下をかいぐった者の友情は、そうでない者には想像が出来ない何かを築いたのであろう。

解放戦争後、ミッデンドルフはベルリンに戻ってフレーベルと再会し、共にシュライエルマッハーの講義を聴講する。ミッデンドルフは学業を続けながら商人バンクタイエル（Banquier）家の家庭教師となる。ミッデンドルフとランゲタールは、解放戦争後の帰還学生の多くがそうだったように<sup>(18)</sup>、ナポレオン支配後の貴族政復活に反対する学生運動ブルシェンシャフトのメンバーとなる<sup>(19)</sup>。ブルシェンシャフトは、民主的憲法制定やドイツ民族の統合とドイツ統一を求める運動だったが、このことは後述するように、ミッデンドルフの生の合一思想に影響を及ぼす。

ケーニヒによると、ミッデンドルフとその甥バーロップやその他のカイルハウ学園教師の多くがブルシェンシャフトだった。例えばイエナブルシェンシャフトの創設者で、熱狂的な運動家たちが集合した1817年のワルトブルク祭の指導者ヴェッセフェルト兄弟がカイルハウ学園にいた<sup>(20)</sup>。これらのことが、「扇動家の巢窟」（ランゲ）<sup>(21)</sup>、「革命的精神の温床」<sup>(22)</sup>として当局の監視対象となる要因をつくった。

## 1-2. カイルハウでの教育活動そしてスイスへ（1817-1839）：

ヘルターシンケンによると、1817年4月、フレーベル

の求めに応じてミッデンドルフは、聖職者になることを望んだ両親の反対にもかかわらず、グリースハイムに着き教育活動を開始する。翌年、カイルハウに移る。当時の教え子であるランゲタールの弟 Ch.E.ランゲタール（1806-1878）は、ミッデンドルフを次のように振り返った。

ミッデンドルフは、23歳の溢れんばかりの若々しい花盛りの男性で、彼の陽気な性格は、子どものような心情を証明した。彼の顔には、魂の純粋さが宿り、情熱的なまなざしは彼の出現に対する関心を高めた。彼とふれあった人はみな、彼にこころ惹かれることを感じた<sup>(23)</sup>。

ランゲによると、カイルハウ学園でのミッデンドルフの授業は、聖歌、宗教、数学基礎、数学応用、幾何学、面積学、ドイツ語、ピアノ練習、ラテン語、ギリシャ語と多様であった<sup>(24)</sup>。教授方法に関してはまだまだ初心者だったので、フレーベルの方法（メトーデ）を習得していった。

1824年、ミッデンドルフは処女作『カイルハウ学園のクリスマス祭』を著す。同書でミッデンドルフは、簡素で粗末な学園ではあったが、クリスマス祭が学園の最大の行事であったことを述べている<sup>(25)</sup>。クリスマス祭には生徒の両親も出席し、プレゼントが配られる。同書でミッデンドルフは、「人間は、神の子として自らを認識し、とくに、そう、『子ども』のなかに人間を尊敬し、評価することを学び、イエスによって、人間の子ども期は、より高い、最も高い意味を得る」<sup>(26)</sup>と述べ、フレーベルと同じく児童神性論（長田新）を展開する<sup>(27)</sup>。そして彼は、神、自然、人間の統合を説き、人間社会の「内的な共同と統一」<sup>(28)</sup>を求めた。この思想は、三月革命期にドイツ民族の統合とドイツ統一を求めたフランクフルト国民議会への連帯へと繋がっていく。

ミッデンドルフは、1826年にフレーベルの兄クリストフの長女アルベルティーネ（1801-1880）と結婚し、一男一女もうける。彼の娘アルヴィーナ（1827-1882）は後にW・ランゲ（1826-1884）と結婚する。クローネによると、フレーベルは、兄の娘アルベルティーネ、エミーリエ（1804-1860：バーロップの妻）、エリーゼ（1814-1881）の三姉妹に恋慕の情を抱いていたという<sup>(29)</sup>。それ故、ミッデンドルフとの関係性が疑問になるが詳細は分からない。

フレーベルは、1831年から36年にかけてスイスで様々な学園をつくった。その一つにヴィリザウ学園がある（1833年4月創設、寄宿舎と全日制の組み合わせで生徒数36名、年齢6～20歳）<sup>(30)</sup>。1835年の春、ミッデンドルフはフレーベルにこの学園の経営を委ねられた。後に、フレーベルの兄クリスチアンの子でカイルハウ学園最初

の生徒フェルディナント・フレーベル（1807-1851）がスタッフに加わった。

ミッテンドルフは、この職責について1832年8月24日付のシュニーダー宛ての書簡のなかで、フレーベルとともに為す「神の仕事」と宣言した<sup>(31)</sup>。ランゲによると、ミッテンドルフは、その後4年間、カイルハウの妻子に一度も会うこともなく職責を果たしたという。また同学園は、イエズス会から激しい非難を浴びたが、ミッテンドルフは後にこのことを、「僕は、野戦で戦場にいたようなものだったんだよ」「大きな火砲を前にして逃げることもなかでできなかったよ」とランゲに語っている<sup>(32)</sup>。州政府がイエズス会と結びついていたことから同学園は閉鎖のやむなきにいたり、ミッテンドルフは1839年にカイルハウに帰ることになる。彼は、フレーベルの教育事業に父親からの相続遺産の全てを捧げた。後年ランゲは義父について、他人に対しては非常に穏やかで慈愛に満ちて振る舞うが、家族に対しては厳しく、家財道具など自らの教育の理想と関係のないものは認めようとしなかったと述べる。また必要な場合、不平も言わず妻子を見捨てたという<sup>(33)</sup>。

### 1-3. カイルハウとブランケンブルクの幼稚園教育活動（1839-1852）

ヘルターシンケンによると、1839年、ミッテンドルフはフレーベルと共にドレスデンに行った。彼は、フレーベルがザクセン王妃の前で講演し、当地に「遊びと作業の施設」を開設することを手伝った。またライブチヒに共に旅してフレーベル思想の普及に務めてカイルハウに戻った。同年5月、フレーベル夫人ウィルヘルミネの臨終に居合わせた。ミッテンドルフは「光りが穏やかに消えるように、より高い目覚めのために眠りについた」と述べている<sup>(34)</sup>。翌40年、キンダーガルテンの創設が呼びかけられる。ミッテンドルフは、カイルハウで教師を続けながら、ブランケンブルクのフレーベルと、遊具や作業道具の開発、幼稚園教師の育成、『日曜誌（Sonntagsblatt）』の刊行に従事した。

1842年、ブランケンブルクに幼稚園教師養成講座（第1回）が開設され、講座を指導するためにミッテンドルフは週3回カイルハウから通ってきた。最初の生徒にイーダ・ゼーレ（1825-1901）がいた。彼女はその後、ブランケンブルクでフレーベルに雇用され、43年にはダルムシュタットで幼児学校を指導する。彼女はミッテンドルフについて次のように回想する。ミッテンドルフは「子どもらしく夢中になること、子ども仲間と子どもそのものになること、いやガキ大将（Herr der kleinen Schar）であること、その際、子どもたちを実施中の遊びに向けて不断に励まし、感激させることを見事に理解していた」<sup>(35)</sup>。ミッテンドルフの娘アルヴィーナも、ブ

ランケンブルクの講座で学んだ。

ミッテンドルフはフレーベル思想をドイツ中に普及させるために、1844年にフレーベルと共に南ドイツを旅した。フランクフルト、ダルムシュタット、ハイデルベルクへ。各地の講演や実演では、フレーベルは何を言っているのかがよく理解されなかったが<sup>(36)</sup>、ミッテンドルフの講演は非常に明瞭で、大変説得力があって、同時にオリジナルなものだったという。ミッテンドルフは、日常において、とりわけ旅の中にあつて日記帳に、祈りの言葉、歌、恩物の使い方や運動遊戯などを素描しており、オリジナルな幼稚園実践を展開した<sup>(37)</sup>。

ミッテンドルフは、1846年にフレーベルとは個別にドイツ西部、ヴェストファーレンやラインラントに旅行する。この旅行で彼は、12月、郷里ブレヒテン近郊のリューネンで幼稚園協会の設立およびヴェストファーレンで最初の幼稚園設置（47年1月）に成功する。同幼稚園は、3歳から6歳までの宗派や宗教の違いを超え、貧しい家庭の子どもも排除されないものとされた。ミッテンドルフはこの幼稚園の女教師のあるべき資質として、職に対する情熱、周囲からの尊敬、宗教上の基礎教養の三点をあげている。そして、ブランケンブルクの幼稚園講座（46/47年）を修了したマリー・クリストを最初の幼稚園教師として着任させた<sup>(38)</sup>。

1848年3月18日、ドイツ三月革命が勃発した。半封建的領邦制国家を打破してドイツ統一、集会・結社の自由、出版の自由、民主的憲法の制定などを求めてフランクフルト国民議会やプロイセン国民議会が開催された<sup>(39)</sup>。市民層や労働者層は様々な集会をもって社会改革を求めたが、そのなかには共産主義者による無償の国民教育などの教育要求も含まれていた<sup>(40)</sup>。国民学校をはじめとする各学校教師たちは、各地で教員集会をもち、無償の国民教育、教会からの学校の解放、統一的学校制度、学問と教育の自由、教師の待遇改善などを訴えた。3月26日のベルリン・チボリ教員集会では、プロイセン国民議会への陳情書が採択されたが、そのなかに、産業の発達によって父母がますます家族関係から奪いさられているとして、児童養護施設（Kleinkinderbewahranstalt）を国民学校にリンクさせることが求められた<sup>(41)</sup>。

8月8日には、第2回ザクセン教員集会（ドレスデン）において、全ドイツ教員集会と全ドイツ教員組合の結成がフレーベルの盟友ヴァンダーによって呼びかけられた。この教員運動のリーダーだったユリウス・ケル（1813-1849）やグスターフ・フリードリヒ・チェチェ（1826-1880）たちとミッテンドルフは、フレーベルとともに8月17日にルードルシュタット教員集会を開催し、幼稚園の普及と幼稚園教師の育成、フレーベルの教材の普及や資金援助をフランクフルト国民議会に請願することを採択した。そして9月28日、チェチェが議長となった全ドイツ教員集会で全ドイツ教員組合が結成され、幼稚園が

ら大学までの統一学校の実現が決議された。幼稚園が最初の国民教育の基礎教育機関として認知されたのである<sup>(42)</sup>。

ミッテンドルフの主著『幼稚園 時代の要請 (Kindergarten Bedürfnis der Zeit)』(1848)は、このフランクフルト国民議会(ドイツ国民議会)に提出された最初の系統的で包括的な幼稚園入門書だった。同書は、幼稚園の意義、遊びと作業を中心とする幼稚園の一日、幼稚園教育が神、自然、人間の生命合一からドイツ統一の礎を実現させるものであることを説いた。1850年初頭、ミッテンドルフはハンブルクに行きフレーベルの幼稚園教員養成講座を準備する。当地でランゲと出会う。翌年ランゲはミッテンドルフの娘アルヴィーネと結婚した。結婚にあたりミッテンドルフはランゲに、次のよう述べた。

君はたぶん物質的な援助を期待したね。僕は君に援助は出来ないよ。というのも、僕はあらゆるもの、あらゆることを、そう身体的力(Kraft)も精神的力も、高い人生の理想に捧げたんだから。僕のようにしたまえ。全ての献身をもってこの理想に仕えなさい。そしてここを安らかにしなさい。僕がこれまで必要なものは何も欠けやしなかったと感じたように、君も、何も欠けてないと感じるよ<sup>(43)</sup>。

6月、ミッテンドルフは、彼以外のカイルハウ関係者が反対するなかでフレーベルの再婚に立ち会う。8月にはフレーベルとアルテンシュタイン遊戯祭を開催。同祭は、「ミッテンドルフがいなければ開催出来なかった」<sup>(44)</sup>とビューローは述べた。

51年8月、プロイセン幼稚園禁令。フレーベルや周囲の失意のなかで52年4月、ミッテンドルフやビューローたちは、フレーベル最後の誕生日を企画。ビューローによると、養成講座の生徒や、幼稚園の子どもが集まり盛会だったという。子どもたちは小さな贈り物や歌、そして劇をして誕生日を祝いフレーベルを感激させた<sup>(45)</sup>。6月フレーベルの臨終でミッテンドルフは末期の水を与える。彼の発案で第2恩物がフレーベルの墓碑となった<sup>(46)</sup>。

#### 1-4. フレーベル死後のミッテンドルフ (1852-1853)

フレーベルの死は、ミッテンドルフにとって大きな悲しみだった。彼はフレーベルの幼稚園と教師養成を引くつぐことを、1852年11月2日付書簡でルードルシュタット公妃に伝えている<sup>(47)</sup>。1853年、マリーエンタールで行われていた養成講座を、彼はカイルハウに移した。フレーベルの妻ルイゼも合流した。ヘルマン・ペーシェ(1826-?)は、この時期になってやっとミッテンドルフがフ

レーベルから自立した人間になったと、1853年オースターでのフレーベル夫人宛書簡で、次のように述べている。

今や彼は正当な土地を手に入れ、今や始めて彼は「水を得た魚」のようだった。新たな活動の場は、全ての活力、全ての生命力をあおった。彼の精神は、今までになく躍動し、彼のところは高揚し、以前よりもはるかに、「自立した」人間の心情を目覚めさせた<sup>(48)</sup>。

この年、ミッテンドルフはザルツンゲンで開催された第5回全ドイツ教員集会で幼稚園について講演した。ビューローによると、ディースターベークも参加した同集会だが、参加者の多くは初等教育(国民学校)の教師であり、幼児の教育は家庭に任せておけば良いと無関心だったという<sup>(49)</sup>。それでもミッテンドルフは、幼稚園伝導のため南ドイツを旅行した。

近年、日本での研究が進んだ<sup>(50)</sup>エレオノーレ・ヘールバルト(1835-1911)は、53年の養成講座に当初は入学を許されなかったが、後に入学することになり、ミッテンドルフと親しく交流する。彼女は、ミッテンドルフの最初の教育学の授業で、「人間の活動と努力は、神と父に近づくことである」と聞き、「新世界」が開けたとして、彼との日々を次のように振り返る。

午後、ミッテンドルフは私たちに散歩に誘った。その途中、彼はよく芽吹く茂みや花開く樹木のまゝで、私たちに自然の生長や被造物の美しさに気づかせるために、立ち止まった。私たちの目はそのとき開かれた。ミッテンドルフが、花や鳥や天空を指し示したとき、以前は盲目だった人が、はじめて観察することを学んだかのようにだった。ミッテンドルフは自然の話す言葉が分かるようであり、自然の言葉を私たちに教えることが出来た<sup>(51)</sup>。

彼女はミッテンドルフの最期を目撃した一人である。1853年11月25日の夜、ミッテンドルフは軽い脳卒中になった。翌朝、彼は授業をしようと試みた。

9時に、ミッテンドルフは私たちに授業をするために来ました。授業内容は、子どものための歌でした。彼は、歌を常に自然との一致において選んでいたもので、この日は冬の歌でした…ミッテンドルフが、歌の旋律を黒板に書こうとしたとき、チョークが彼からこぼれ落ちました。彼は、腕に力が入らないと嘆きました。事実、その夜に脳卒中を起こすことになったのでした<sup>(52)</sup>。

翌27日の朝、彼は死去した。

次に、ミッテンドルフの幼稚園理念を知るために、彼の名著『幼稚園 時代の要請』の概要をヘルバルトの分析を参照しながらから考察し、彼の幼稚園女教師養成からその歴史的意義をみてみたい。

## 2-1. ミッテンドルフの幼稚園教育論

彼の名著『幼稚園 時代の要請 統一的国民教育の基礎 ドイツ国民議会に謹呈 1848』<sup>(53)</sup>は、幼稚園に関して分かりやすく包括的に説いた入門書である。フレーベル自身は、カイルハウの教育をまとめた『人間の教育』とは違って、単行本として幼稚園教育について体系的、包括的に記してはいない。それ故、同書はフレーベルが生きた時代のフレーベル主義幼稚園の実際を知る上で貴重である。『幼稚園 時代の要請』の内容は、ヘルターシンケンの分析を参照するなら、①なぜ幼稚園が必要なのか、②幼稚園の日課からその教育的役割、③幼稚園教育の方法（メトーデ）の思想的基盤、④生の合一からドイツ国民議会の課題であったドイツ民族の統合（ドイツ統一）にまとめられる。

### ①なぜ幼稚園が必要なのか

ミッテンドルフは幼稚園に保育機能と教育機能をもたせている。まず幼稚園には、両親が就労している家庭、生活が困窮している家庭の子どもたちの保育所（Bewahranstalten）の役割があるとする<sup>(54)</sup>。それは、1830年代にはじまるドイツ産業革命と初期工業化、それに伴う大衆貧困状況（Pauperismus）と、ミッテンドルフたちも無縁ではなかったことを示している<sup>(55)</sup>。そして中層上層の家庭の子には教育機能をもたせている。その際、i) 子育ては母親の義務ではないか、ii) 幼稚園は親の愛に適うものではない、iii) 子どもを両親から引き離すことはおかしい、といった批判にミッテンドルフは、放任されたあるいは甘やかされている子どものためにこそ、幼稚園は存在意義を有すると答える。例えば、都市部において狭隘な住宅で十分に動き回れる空間をもたない子どもにとって幼稚園は必要であり、農村部とはいえ多忙な母親によって放任され、やんちゃになった（Kraft und Trieb zur Tätigkeit immer mehr erwacht）子どもの躰のために幼稚園は無くしてはならないと説く<sup>(56)</sup>。

### ②幼稚園の日課からその教育的役割

ミッテンドルフは、幼稚園の一日を次のように紹介する。「登園と自由遊び→輪になってお祈り→屋内での遊びや作業→間食→屋外での遊びや作業→輪になってお別れの挨拶」。ミッテンドルフは、幼稚園でなされる遊びとして、積み木、運動（運動遊戯）、ダンス、体操、表現の遊びなどを取り上げている。ヤーンの影響を受けた

ものも多い。多くの場合、歌が伴う。また将来の労働につながる作業として、折り紙、小棒による造型、切り取り、庭仕事などを紹介している。彼は、フレーベルと同じく「全く高い意味が子どもの遊びのなかにある」<sup>(57)</sup>としながら、「遊びと作業の多様性は、子どもの生活の芽吹きにおいて、しっかりとした蓄のなかで、しずかに内包されており、それらはみな、徐々に、自然の無尽蔵の宝庫の中で、人間生活の豊かさのなかで花開く」と述べ<sup>(58)</sup>、遊びや作業を「人生の鏡であり肖像」と位置づける。

彼は、「秩序あるきまり」をもつ遊び仲間によって、子どものわがままが是正されること、運動遊戯や体操によって四肢や身体トレーニングが為されることを述べている。行進遊戯（姿勢をまっすぐに、腕を振って、同じ歩調で進もう）のように、ヘルターシンケンも指摘しているが、体操に行軍を取り入れたヤーンの影響が明白なものもある<sup>(59)</sup>。

### ③幼稚園教育の方法（メトーデ）の思想的基盤

ミッテンドルフは、自らの幼稚園教育思想の基盤に、ルター、カント、ゲーテ、ジャン・パウルの名をあげながら、ルソーの「自然による教育」、ペスタロッチの直観や居間の教育、母性尊重を取り上げている。とくに「遊び、遊具、作業具は、段階を付けられて、子どもの発達に相応して提供されねばならない」<sup>(60)</sup>といった合自然性（naturgemäße Weise）の原理を彼はメトーデとして重視した。

ミッテンドルフは、次のようにメトーデをまとめている<sup>(61)</sup>。

- ・全ての子どもは、自らの「固有な力」に応じて、「自らの固有な方向性」そのものに従って、「強制されることなく」、自由に創造出来るものであり、自由に模倣し、自由に自分の「心情」を育てることが出来るものでなくてはならない。
- ・実例や内容は、子どもの日常に由来し、女教師によるさらなる刺激は、「既知のものから、未知のものへ、近くのものから、遠くのものへ、さらにまた近くへと移行するべきだ」。
- ・遊び、遊具、作業具は、段階を付けられて、子どもの発達に相応して提供されるべきだ。
- ・その際、幼稚園女教師は、つねに体験（Erlebte）や造型（Gestaltete）を「言葉や音声」で表現することを援助する。というのも、言葉や音声は、成長する思索の行為や描写の表現だから。
- ・全ての日程は、「人間精神の内的リズム」に従うべきだ。幼稚園で、たくさん「静かな作業」をした後は、だから「活動的な行動（tun）」が続き、幼稚園の庭での自由で、指導された運動遊戯が続き、そしてそれか

らまた、静かな活動や、作業具による「仕事 (Arbeiten)」。なぜなら、子どもは「適度な交換」を求めるからだ。

#### ④生の合一からドイツ民族の統合 (ドイツ統一) の役割

ミッテンドルフは、その生の合一の思想が幼稚園において実現されると説く。彼は言う。「だから、幼稚園の生活は、明瞭な意図的養護の下で、子ども期の自由な倫理構築から出発し、予感や信仰によって不断に成長しながら、人生の最も高い源泉へとたどり着き、人間と、自然と、神の合一に包含されていることを見いだす」<sup>(62)</sup>。幼稚園という教育共同体を経験することによって子どもたちは、階級や民族や宗派の違いを超え、一つの存在 (Sein)、一つの思想 (Denken)、一つの生命 (Leben) として、一つの国民 (Nation) へと育っていく<sup>(63)</sup>。

ミッテンドルフは幼稚園には次のような有効性があると説く。

富めるものも、貧しき者も、高貴な者も、卑しい者も、ユダヤ人であろうと、キリスト教徒であろうと、いや、プロテスタントであろうと、カトリックであろうと、共に祝福されることである。一人は他人によって育ち、他人のうえに成長し、高まる。そして、先入観なくそのことを顧慮するひとは、思わず叫ぶに違いない。ここでは、ほんとうに、子どもたちは一人の父親、一つの人間家族の子どもたちなんだと<sup>(64)</sup>。

万人平等の原則に基づいてドイツ統一と自由を求めたフランクフルト国民議会に、フレーベルと共に幼稚園設置の必要性を訴えたミッテンドルフの最大の論拠がここにあるのではないか。フレーベルは、政治と教育の統合、ドイツ民族の合一を唱え、「私は共和国の実現を目指して教育をしていきます」と1848年7月17日付の書簡でフランクフルト国民議会最左派 (ドンネルス派 = ドイツ・ジャコパン派) カール・ハーゲン (1810-1868) に書き送っているが、それはミッテンドルフの意志でもあったろう<sup>(65)</sup>。

### 2-2. ミッテンドルフの幼稚園女教師養成と女性解放

1848年8月のルードルシュタット教員集会に参加したヘンリエッテ・ブライマンは母親にあてた書簡で次のように記した。「フレーベルとミッテンドルフは、他のたいていの男性とは女性観が全く違っていました。彼らは、私たち女性を、結婚以外にも子どもの養育者として尊敬される地位を与えるに十分に価値あるものと見なしました」<sup>(66)</sup>。岩崎次男は、フレーベルの幼稚園女教師養

成を女性解放に功績を残したものと位置づけているが<sup>(67)</sup>、この評価はミッテンドルフにも当てはまるだろう。

川越も述べるが、労働者貧民層ではない女性が職業をもつことは、結婚できない、母となれない「恥ずかしいこと」と否定されていた時代<sup>(68)</sup>、三月革命を迎えて、進歩的女性たちは女性協会等を結成し、男女の同権や職業選択の自由を求めて運動した。ルイーゼ・オットー・ペーターズ (1819-1895) は、『女性新聞』(1849年4月) を刊行し、全ドイツ女性協会設立(1865)の中心メンバーとなるが、働く女性の職場としての幼稚園とその女教師養成を高く評価していた<sup>(69)</sup>。

ミッテンドルフは、マーレンホルツ = ビューローに対して、教職は女性の最高の天職と言っていたが<sup>(70)</sup>、それは男女の性役割分担からくる「母性主義フェミニズム (赤木)」<sup>(71)</sup>に由来するものであったろう。フレーベルはビューローとの会話で、性差を考えない男女同権を否定しているが、それはミッテンドルフにおいても同じだろう<sup>(72)</sup>。ただフレーベルの (そして恐らくミッテンドルフの) 母性礼賛には、「聖母マリア崇拜 (豊泉)」<sup>(73)</sup>があり、性役割分担を疑問視する現代的なジェンダー論で評価することは早計である。

### 3. なぜ、ミッテンドルフはフレーベルの使徒でありえたのか

歴史の新たな創造者の多くがそうであったように、フレーベルも毀誉褒貶相半ばする人物であった。小笠原は、兄クリストフが、青年フレーベルを反抗的で自惚れた性格であったと述べていたことを紹介している<sup>(74)</sup>。ビューローは、フレーベルが、周囲の人物には一切の反対を許さず人格的に服従することを求めたと振り返り<sup>(75)</sup>、スイスでフレーベルと袂を分かれたランゲタールをフレーベルは決して許さなかったとランゲは言う<sup>(76)</sup>。

H・ハイラントは、ナチス・ドイツ期に、フレーベルを国家社会主義的に解釈し、彼の民族主義的特徴を絶賛したフリッツ・ハルプターでさえ、フレーベルは思いやりがなく、未成熟で、オール・オア・ナッシングを要求し、引く寄せるか突き放すかの偏った人格の持ち主だとして批判したと述べる<sup>(77)</sup>。

バーロップ研究者のJ・W・ゴースによると、フレーベルは自らの要求に無条件の服従を求めたが、対立が生じた場合、ミッテンドルフは直ぐさま譲歩して深刻な対立をもたらさなかったが、ランゲタールは恨みをいだいて引き込み、バーロップはフレーベルと対立を辞さず説得を試みたという<sup>(78)</sup>。

なぜ、ミッテンドルフはフレーベルと共にあり続けたのか。

マリーエンタールでフレーベルやミッテンドルフと共

に活動したヘルマン・ペーシェは、フレーベルとミッテンドルフの関係を次のように述べた。

創造的で男性的なフレーベルは、ミッテンドルフの女性的で献身的な受容性のなかに、完全な補完性をみた。この両者は完全に調和し、一体とり、調和的全体となった—いわば精神的に夫婦となった…人は、両者の係を全く誤解して、ミッテンドルフをフレーベルのただのコピーと見なうとするかもしれない。違う。フレーベルの本質は、ミッテンドルフにいて固有のかたちで受け取られ、ミッテンドルフによって吸収され、ミッテンドルフその人の血となり肉となったのである。

フレーベルは、いわば「学園の父」であるなら、ミッテンドルフは「学園を素敵に指導する母」であった。

ミッテンドルフは、どこでも「仲裁的性格」だった<sup>(79)</sup>。

ペーシェによると、フレーベルは男性的性格(Mannesnatur)で支配的性格であり、ミッテンドルフは女性的性格(weibliche Natur)で受容的で、両者は精神的な夫婦(geistige Ehe)だった。しかしミッテンドルフはフレーベルのコピーではなく、フレーベルの精神は、ミッテンドルフにおいて具現化されたのであり、フレーベルの理念を、情緒的で空想力豊かな彼が、詩、遊び、歌、恩物の活用において実現していったという<sup>(80)</sup>。

ビューローも、両者を男性的、女性的で区分し、「フレーベルが創造したものを、ミッテンドルフは取り入れて、献身的に整理し、理解しやすい形にして返すのがつねであった」と述べる<sup>(81)</sup>。

ディースターベークも、両者を男性的、女性的で区分する。

フレーベルとミッテンドルフの違いは大きく、分かりやすかった。フレーベルは、初対面のときでも、顔つきや表情から、落ち着きのない活動や、しばしば慌てふためいた行動から、万人にとっては、注目や好奇心を刺激する目立つ存在だった。それに対してミッテンドルフは、落ち着いた態度から愛される存在であり、そもそも—誤解を恐れずに言うなら—チャーミング(herzgewinnend)と言われ続けた。

意向や方向性では、両名は、びっくりするぐらい一致している。両名は、真理を得ることを欲した。フレーベルは、男性的だったが、ミッテンドルフは女性的な性格だった<sup>(82)</sup>。

ヨハネス・プリュウファーも、男性的、女性的で両者を区分し、「フレーベルは堅い鋼鉄のような、鋭く刻ま

れた男性的性格である…ミッテンドルフの性格は全く違い、彼は柔和で、ほとんど女性的な存在で、受け身であることが彼の突出した性格だった<sup>(83)</sup>と述べている。

ミッテンドルフがなぜフレーベルの使徒たりえたのか。共に解放戦争を闘った戦友だったこともあるだろう。汎神論的な神的統一という世界観が一致していたこともあるだろう。それ以上に、彼らの同時代人や後年のフレーベル研究者の言説から、彼らが男性的女性的な「精神的夫婦」であり、激しく攻撃的なフレーベルを、柔和で受容的なミッテンドルフが補い、難解で深遠なフレーベルの理念を、ミッテンドルフが自らのオリジナリティーをもって具体的で分かりやすく伝播していたことが理解できる。ミッテンドルフも恐らくフレーベルから批判され対立を余儀なくされたこともあるだろう。だが、ビューローへの書簡で、ミッテンドルフがフレーベルについて、「悪口や非難やさらには迫害にも耐え…この悪だくみをしないところ(Seele)、純情で子どものようなところ(Gemüt)を知りかつ愛するようになった<sup>(84)</sup>と述べている言葉が全てを語っている。

## おわりに

以上、フレーベルの使徒としてのミッテンドルフの生涯と教育活動そして彼の教育思想をみてきた。少年期、成績優秀だった彼は父母の期待を背負って聖職者になるべく、ベルリン大学に入学した。当時のベルリンは、プロイセン改革の最中にあつた。自由主義的、民主主義的な学風のなかで学んだ彼は、やがて対ナポレオン祖国解放戦争に志願し、フレーベルと出会う。フレーベルの教育思想に共鳴した彼は、聖職者の夢を捨ててフレーベルと生涯を共にした。子どもにも他人にも優しく接したミッテンドルフだったが、自分と家族には厳しく接した。カイルハウ学園の盛衰、スイスでの学校設立と迫害、幼稚園の普及と禁令。フレーベルの喜びはミッテンドルフの喜びであり、フレーベルの苦難はミッテンドルフの苦難でもあった。キリスト教信仰、生の合一の思想、児童神性論、幼稚園教育論など、根本的世界観や教育観においてフレーベルと違うことがなかった彼だが、何よりも、フレーベルの長所も短所も理解したうえで、フレーベルとフレーベルの理想を愛し続けた一生であつた。

### ○補足：ミッテンドルフの略歴<sup>(85)</sup>。

1793年：9月20日—農民ディートリッヒ・ミッテンドルフと妻カタリーナの5人きょうだいの末っ子としてプレヒテンで誕生。村の学校(Dorfschule)に通学。

1803年：ドルトムントの古文書館附属ギムナジウムの生徒。彼は、ミッテンドルフの姉ゾフィーと結婚した義兄ヘルマン・バーロップのところで寄宿。

1811年：10月31日—福音派の神学を学ぶためベルリン大

学に入学。シュライエルマッフェアー、フィフイテ、「体操の父」ヤーンのもとで研究。

1813年：リュッツオー義勇軍に、対ナポレオン解放戦争に自由意志で参加。フレーベルやランゲタールと親交。

1814年：研究継続。ベルリンで家庭教師。

1817年：4月13日、ベルリンを去って、フレーベルに従ってグリースハイムへ。それから、チューリングゲンのルードルシュタットのカイルハウへ。カイルハウの「一般ドイツ教育舎」の教師となる。

1824年：『カイルハウ学園のクリスマス祭』を刊行。

1826年：フレーベルの姪アルベルティーネ・フレーベルと結婚。

1827年：娘アルヴィーナ誕生。代父はフレーベル。

1830年：ミッデンドルフの甥、ヨハネス・バーロップがカイルハウ学園の校長となる。息子ヴィルヘルムが誕生。

1835-39年：ミッデンドルフ、フレーベルの命で家族無しでスイスに行く。

1839年から：カイルハウ教師。フレーベルとブランケンブルクで遊具を研究。『日曜誌』を刊行。積み木や歌を収集、改善。

1840年：6月28日のゲーテンベルク祭に、フレーベルによって「一般ドイツ幼稚園」設立。

1843年：ブランケンブルク幼稚園女教師養成コース。

1844年：フレーベルとフランクフルト、ダルムシュタット、ハイデルベルクに、幼稚園理念の普及のため旅行。

1846年：ドイツ西部、ヴェストファーレン、ラインランドへ旅行。リュネンに幼稚園設置。

1848年：8月ルードルシュタット教員祭。幼稚園から大学までの統一学校制度の推進を決議。ミッデンドルフ著『幼稚園、時代の要請、統一的国民教育の基礎』が、フランクフルトのドイツ国民議会に供される。

1851年：4月21日－アルヴィーナ・ミッデンドルフは、フレーベル全集編集者ランゲと結婚。

1852年：6月21日－マリエンタールでフレーベル死去。ミッデンドルフによって、マリエンタールの幼稚園女教師養成コースが継続。ミッデンドルフは、フレーベルによって1849年に設立された「発達に即して教育する人間教育による全面的生命合一のための学校」をカイルハウに移す。「フレーベルの最後の誕生祭、最後の日々、葬儀」を公表。

1853年：新たな幼稚園女教師養成コースを開設。ミッデンドルフは、第5回全ドイツ教員集会で演説。南ドイツ、とくにダルムシュタットのフェルジングのところへ旅行。10月末、新たな幼稚園女教師養成コースを開始。11月27日、カイルハウで死去。

## 註：

- (1)Dieter Höltershinken: Von Spielen, Liedern und Gebeten für den Kindergarten.Wilhelm Middendorff ein vergessener Pädagoge, Bochum/Freiburg 2010, S.7.
- (2)湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』風間書房、2001年、166頁。
- (3) 同 『近代日本幼児教育基本文献集』第4巻「フレーベル研究」日本図書センター、2017年、30頁。
- (4)湯川（2001年）前掲、167頁。
- (5)日本におけるフレーベル研究の代表者であると言ってよい荘司雅子（例：『フレーベルの教育学』1943）、岩崎次男（例：『フレーベル教育学の研究』1999）、小笠原道雄（例：『フレーベルとその時代』1994）のそれぞれがミッデンドルフの果たした役割を高く評価しているが、彼の生涯については軽く触れているに過ぎない。  
唯一、ミッデンドルフの生涯を簡潔に述べたものとして『バスタロッチー・フレーベル事典』（1996/2006年）の酒井玲子「ミッデンドルフ」の項目をあげる事が出来る。
- (6)Julius Fröbel: Ein Lebenslauf. Aufzeichnung, Erinnerungen und Bekenntnisse. 1890, S.35.
- (7)ebenda. S.38. Vgl. Helmut König:Friedrich Fröbels Verbindungen zur kleinbürgerlichen Demokratie in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts. Teil 2. IN: Jahrbuch für Erziehungs=und Schulgeschichte 25. 1985, S.47（拙訳を「ドイツ1848年革命期における教員運動史資料集成」『福岡大学研究部論集B社会科学編6』2013年に所収）。
- (8)Vgl.Helmut König (1987): Friedrich Fröbels Verbindungen zur kleinbürgerlichen Demokratie in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts. Teil 4. IN: Jahrbuch für Erziehungs=und Schulgeschichte 27. 1987, S.95.u.106.（拙訳を『福岡大学研究部論集B社会科学編8』2016年に所収）。
- (9)Pädagogische Rundschau, 2013/2, S.229.
- (10)Middendorff: Tagebuch 1846, zit. nach Höltershinken, a.a.O.,S.14.
- (11)ヨハンナ・ソフィア（1779-1847）。夫はヨハン・ハインリッヒ・バーロップ（1759-1830）で彼らの子がカイルハウ教師ヨハネス・アーノルト・バーロップ（1802-1878）。この子はミッデンドルフの甥となる。
- (12)J・シュトライザンド、小森他訳『ドイツ人民の歴史』未来社、1983年、86-87頁参照。
- (13)長尾十三二他『ドイツ教育史Ⅱ』講談社、1977年、13頁。
- (14)Julius Fröbel, a.a.O.,S.27.Vgl.Werner Lemm:

- Schulgeschichte in Berlin, DDR, 1987, S.55.
- (15) H・ケーニヒ編、岩崎他訳『フレーベル賛歌』フレーベル館、1991年40頁 (H・König (Hrsg.): Mein lieber Herr Fröbel, 1990, S.40-41)。
- (16) W・ランゲ編、小原他訳『フレーベル全集 I』玉川大学出版部1978年、230頁。
- (17) マーレンホルツ=ビューロー、伊藤訳『教育の原点 回想のフレーベル』黎明書房、1972年、244-245頁 (B. von Marenholtz=Bülow: Erinnerungen an Fröbel, 1876, S.204 f)。
- (18) Dietrich Heither: Burschenschaften, Köln 2013, S.14.
- (19) 拙稿「ヘルムート・ケーニヒとフリードリヒ・フレーベル」(『福岡大学研究部論集』B-Vol. 8、2016年) 91頁参照。ドイツ国旗の「黒・赤・黄」は、リュッツオー義勇軍の制服のシンボル (黒マント、赤の肩章、金ボタン) であり、ブルシェンシャフトの象徴でもあった。  
(Vgl. Europa und die Welt vom Wiener Kongress bis 1945, Klett 2008. S.16)。旧東ドイツのハレ大学歴史学部が、中等学校用に編集した歴史教科書にブルシェンシャフトに関する次のような文章がある。1817年10月18日、ブルシェンシャフト結成を祝うワルトブルク祭の朝、「行進の先頭には、リュッツオー兵団の制服の色で飾られた旗がなびいていた。つなわち黒・赤・金であった」(大島訳『ドイツ民主共和国 2』ほるぷ出版、1983年、198頁)。
- (20) Helmut König: Friedrich Fröbels Verbindungen zur kleinbürgerlichen Demokratie in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts. Teil 1. IN: Jahrbuch für Erziehungs- und Schulgeschichte 24. 1984, S.66 (拙訳を『福岡大学人文論叢』第39巻第3号に所収)。
- (21) 『フレーベル全集 I』前掲、46頁。
- (22) Julius Fröbel, a.a.O., S.28.
- (23) Langenthal, Ch.E.: Keilhau in seinen Anfängen. IN: Neue Keilhauer Blätter, 1. 1994, zit. nach Höltershinken, a.a.O., S.22.
- (24) Stundenplan der Erziehungs=Anstalt in Keilhau, IN: Friedrich Fröbels gesammelte pädagogische Schriften, Abt.1, Bd.1, 1862 (1966), S.359-363.
- (25) Wilhelm Middendorff: Die Feier des Christfestes der Erziehungsanstalt in Kailhau, 1824. IN: Zimmermann; Fröbels kleinere Schriften zur Pädagogik 1914, S.262f. (同書からの引用にあたっては、Höltershinken, a.a.O., S.100-101を参照した)。
- (26) Middendorff (1824), a.a.O., S.268. (同上 S.101参照)。
- (27) 長田新『児童神性論』目黒書店、1924年。
- (28) Middendorff (1824), a.a.O., S.272. (同上 S.102参照)。
- (29) Detlef Krone: Der Pädagoge F. Fröbel und die Frauen. Frankfurt.a.M.2011, S.56f. 小笠原道雄『フレーベルとその時代』玉川出版、1994年、214頁参照。
- (30) 小笠原、同書、219頁。
- (31) Höltershinken, a.a.O., S.30.
- (32) Lange W.: Wilhelm Middendorff. IN: Jahrbuch für Lehrer und Schulfreude, 5, 1855, zit. nach Höltershinken, a.a.O., S.29.
- (33) Vgl. ebenda, S.27-28. 『フレーベル全集 I』前掲、41頁参照。
- (34) Hanschmann, A.B.: Friedrich Frobel. 1875, zit. nach Höltershinken, a.a.O., S.34.
- (35) Ida Seel: Meine Erinnerungen an Fr.Fröbel, 1886. IN: Heiland; Fr.Fröbel, Vorschulerziehung und Spieltheorie. 1982, S.184. (同書からの引用にあたっては、Höltershinken, a.a.O., S.35を参照した)。
- (36) ランゲも、フレーベルの話が聴衆に理解されずにフレーベルの不機嫌さの誘因となったが、ミッデンドルフの話はよく理解されたことを述べている。また彼はミッデンドルフが「親友フレーベルの努力をまだ知らないにいたっていない祖国ドイツのあちこちを、新しい理念の使徒として遍歴しなければならなかった。愛情に輝く人好きのする如才ないその個性と、人の心をひきつける説得力のあるその力強い雄弁とによって、かれは世人の関心を呼びさまし、感激させずにはおかなかった」と記している (『フレーベル全集 I』: 4~5頁)。
- (37) Vgl. Höltershinken, a.a.O., S.36.  
例えば、ミッデンドルフは日記帳に下図のような「積み木と遊び歌」を創作している (Tagebuch 1843, zit. nach Höltershinken, a.a.O., S.116)。



また、モーツァルトの曲に次のような歌詞を付けて子どもたちに歌わせた (Zit. nach Höltershinken, a.a.O., S.117)。

„Der Schnee ist weggenommen ...“<sup>241</sup>

W. Mozart.

1. Der Schnee ist weg-ge-nom-men von Ber-ge-n, Wald und  
Feld. Der Frühl-ing ist ge-kom-men in uns-re schö-ne Welt.

2. Die Bächlein wieder fließen  
So munter in dem Thal,  
Die Schöichen auf den Weiden  
Sind froh bei ihrem Wahl.

3. Die kleinen Vögelchen steigen  
Empor aus grüner Flur,  
Sie jubeln und heuzigen  
Die Schönheit der Natur.

4. Die Böglein in den Bäumen  
Sind lustig alle Zeit,  
Sie wiegen sich und träumen  
Und machens Neß bereit.

5. Die fleißigen Bienen jummeln,  
Sie fliegen aus und ein,  
Sie gehn zu allen Blumen  
Und tragen Honig ein.

6. Die Kinder gehn im Grünen  
Mit froher Seele hin;  
Der Frühl-ing ist erblühen,  
Nüt alles, alles blüht.

W. Ribbenborff.

„Froh sehen wir uns wieder...“<sup>242</sup>

Mozart.

1. Froh se-hen wir uns wie-der im kind-lich-en Ver-ein, durch  
Spie-le, Wor-te, Sie-der uns A-bernd zu er-freu'n.

2. Mit Freuden wir uns finden  
In jeder Jahreszeit;  
Die grünen Bäume künden  
Die holde Frühlingszeit.

3. Die Blumen uns entzünden  
In warmer Sommerzeit;  
Der Herbst will uns erquiden  
Mit reicher Fruchtbarkeit.

4. Und kommt der kalte Winter  
Soll Arbeit uns erfreu'n,  
Dann laßt uns, liebe Kinder,  
Nest sitz und fleißig sein.

W. Ribbenborff.

<sup>241</sup> Aus: Naveau, Marianne und Thekla: Fröbel-Spiele. Lieder und Verse für den Kindergarten, Elementarklasse und Familie. Hamburg, Berlin 1920 (18. Aufl., 1. Aufl. 1870) Nr. 158, S. 82. Text: W. Middendorff, Melodie: W. Mozart.  
<sup>242</sup> Aus: Naveau, M. und Th., a. a. O., S. 3, Nr. 6. Text: W. Middendorff, Melodie: W. Mozart.

(38) Vgl. ebenda, S.40.

(39) 拙稿「教員運動家としての K.F.W.ヴァンダーの生涯と教育活動－1848/49年のドイツ革命期における教員運動の様相として－」（『福岡大学人文論叢』24巻4号）3-12頁参照。

(40) マルクス／エンゲルスは1848年、「ドイツにおける共産党の要求」や「共産党宣言」において「無料の普通国民教育」の実現を求めている（『マルクス・エンゲルス選集2』1973年、大月書店より）。

(41) 拙稿「ヘルムート・ケーニヒとフリードリヒ・フレーベル」、前掲、89頁。

(42) 同、93頁。

(43) Lange, W.: Alwina Lange, geb. Middendorff. IN: Rheinische Blätter für Erzieh-ung und Unterricht, Jg.1883, zit. nach Höltershinken, a.a.O.,S.44-45.

(44) マーレンホルツ＝ビューロー、前掲、120頁 (B.von Marenholtz=Bülow, a.a.O.,S.71.)。

(45) 同、205頁 (ebenda, S.179f)。

(46) 同、235頁 (ebenda, S.194f)。

(47) Sellmann, A.W.: Wilhelm Middendorff IN: Westfälische Lebensbilder, 1932, zit. nach Höltershinken, a.a.O.,S.45-46.

(48) Pösche, H.Wilhelm Middendorff. IN: Reinische Blätter und Unterricht, 1854, zit. nach Höltershinken, a.a.O., S.51-52.

(49) マーレンホルツ＝ビューロー、前掲、248頁 (B.von Marenholtz=Bülow, a.a.O.,S.207.)。

(50) ハールバルト・小笠原訳(2014)『フレーベルの晩年』東信堂、2014年。田岡由美子「E・ハールヴァルトのイギリスにおける活動に関する一考察」（『人間教育の探究』29号、2017年）。豊田和子「弟子たちによるF・フレーベル理解 (1)－E・ハールヴァルトの場合－」（『高田短期大学紀要』20号、2002年）。

(51) Eleonore Heerwart: Wilhelm Middendorff. IN: Kindergarten 1894, S.90. (同書からの引用にあたっては Höltershinken, a.a.O.,S.67を参照した)。

(52) Ebenda,S.10. (同書からの引用にあたっては Höltershinken, a.a.O.,S.67を参照した)。

(53) Middendorff: Kindergarten. Bedürfnis der Zeit, Grundlage einigender Volkserziehung. Der deutschen Nationalversammlung zur Würdigung vorlegen.1848. 同書は、1862年にランゲによって再版された。なお、ヘルターシンケンによると、同書はフランクフルト国民議会に提出されたが、おそらく読まれてはいないだろうとのことである (Höltershinken, a.a.O.,S.74)。

(54) Middendorff (1848), a.a.O.,S.2. (同書からの引用にあたっては Höltershinken, a.a.O.,S.78を参照した)。

(55) 川越は、1830年代から40年代の初期工業化時代の労働者階層の子どもを次のように記している。「家族生活はここベルリンでも住民のこの階層では、完全に破壊されている。父親が一日中家を離れているだけでなく・・・母親までもが日長、彼と同じかまたは異なった工場で働いているのだ。子供たちは何らかの仕事につくえるようになるまでは、まったく放置されている。ベルリンの6万6000人の就学義務年齢にある子供のうち、2万9000名はまったくの無知と放縦のなかでその日その日を暮らしている」（川越修『ベルリン 王都の近代』ミネルバ書房、1988年、53頁）。

(56) Middendorff (1848), a.a.O.,S.2. (同書からの引用にあたっては Höltershinken, a.a.O.,S.78を参照した)。

(57) ebenda, S.21. (同上 S.86参照)。

(58) ebenda, S.29. (同上 S.93参照)。

(59) Höltershinken, a.a.O.,S.84.

(60) Middendorff (1848), a.a.O.,S.33. (同書からの引用にあたっては Höltershinken, a.a.O.,S.98-99を参照した)。

(61) ebenda. (同上参照)。

(62) ebenda.S.43. (同上 S.91参照)。

(63) ebenda.S.61. (同上参照)。

(64) ebenda.S.32. (同上 S.89参照)。

(65) フレーベル、岩崎訳『幼児教育論』明治図書、1972年、164頁。

また、1848年にフレーベルの幼稚園教員養成講座を受講し、ゴータの幼稚園教師だったクリスティアーネ・エルトマンは、フレーベルに宛てた48年8月7日(ルー

- ドルシュタット教員祭直前) の書簡で、幼稚園はドイツ統一のためにあると述べている(『フレーベル賛歌』前掲、82頁)。
- (66) Helmut König (1986): Friedrich Fröbels Verbindungen zur kleinbürgerlichen Demokratie in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts. Teil 3, 1986. IN: Jahrbuch für Erziehungs- und Schulgeschichte 26. (拙訳を『福岡大学研究部論集B社会科学編8』2016年に所収) S.172.
- (67) 岩崎次男『フレーベル教育学の研究』玉川出版、1999年、299頁。
- (68) 川越修他『近代を生きる女たち』未来車、1990年、52頁。
- (69) 拙稿「ヘルムート・ケーニヒとフリードリヒ・フレーベル」前掲、94頁。
- (70) マーレンホルツ=ビューロー、前掲、54頁 (B.von Marenholtz=Bülow, a.a.O.,S.31.)。
- (71) 赤木登代「ドイツ第一派女性運動における女子教育」(『大阪教育大学紀要』2007. 2.)
- (72) マーレンホルツ=ビューロー、前掲、59頁 (B.von Marenholtz=Bülow, a.a.O.,S.33f.)。
- (73) 豊島清浩『フレーベル教育学研究』川島書店、2014年。
- (74) 小笠原、前掲、44頁。
- (75) マーレンホルツ=ビューロー、前掲、144頁 (B.von Marenholtz=Bülow, a.a.O.,S.109f.)。
- (76) 『フレーベル全集1』前掲、32頁。
- (77) Helmut Heiland: Frobelforschung heute, 2003, S.231.
- (78) Gooß, J.W.: Johanness Barop. Eine biographische Skizze. 1878, zit. nach Höltershinken, a.a.O.,S.64-65.
- (79) Pösche, H.: Wilhelm Middendorf, a.a.O.,1854, zit.nach Höltershinken, a.a.O.,S.50-51.
- (80) ebenda, S.49.
- (81) マーレンホルツ=ビューロー、前掲、47頁 (B.von Marenholtz=Bülow, a.a.O.,S.24f.)
- (82) Friedrich Diesterweg (1855): Wilhelm Middendorff, 1855. IN: Diesterweg, Sämtliche Werke Bd.11. Berlin 1972, S.382-383. (同書からの引用にあたってはHöltershinken, a.a.O.,S.60を参照した)。
- (83) Johannes Prüfer: Friedrich Fröbel. Leipzig Berlin 1914, S.113. (邦訳、乙訓他『フリードリヒ・フレーベル』東信堂2011年参照)。
- (84) マーレンホルツ=ビューロー、前掲、229頁 (B.von Marenholtz=Bülow, a.a.O.,S.195.)
- (85) Höltershinken, a.a.O.,S.157-158.

※本稿執筆にあたっては、湯川嘉津美上智大学教授から有益な示唆を得ました。